

『なぜ表現は変わるのか——古代文学の表現史2——』経過・総括・発表要旨

八十三年度夏季セミナーは八月二十五～二十七日にわたり、例年以上の参加者(三十名)を集めて行われた。本年度の総テーマも、例年に倣ってセミナー委員(斎藤英喜、清水章雄、高野正美、野田浩子、吉田修作)を中心に討議を重ねた結果、前年度のテーマである〈表現史〉を継承し、展開させることとし、年度当初に承認された。

前年度は三つの柱を中心にそれぞれ作品を限定して、表現の史的展開の要因を「言語表現それ自体に内在する力学」に求め、文学固有の自立した表現の史を構成すべく意図したものであったが、結果的には〈表現史〉の概念をめぐって相互の振幅が大きかったために、一部混乱し、統一した視点を見出すまでには至らなかった。

本年度も〈表現史〉を継承するに当って、この点について十分に検討されなかったために、不透明な点をさながら抱え込んだままになっているが、おおよそ次のような見通しの元に推進しようということになった。その意図するところは、単に個々の作品に内在する歴史性を指摘し、それら相互の比較によって〈史〉を組み立てるのではなく、個々の作品の言語表現の仕組みを明らかにし、そのメカニズムを究明すること、いいかえれば、表現それ自体の内に表現を展開させる論理を見出し、さらに〈なぜ表現は変わるのか〉という

表現の動態の問題を押えることで、〈史〉を新たに組立てようとした点にある。

具体的には「竹取物語」を一方に据えて、前代の言語表現が竹取に象徴されるような表現の状況へ変質・展開して行く様相を探ることとし、「万葉短歌と竹取」「万葉長歌と竹取」「記紀と竹取」「風土記と竹取」「靈異記と竹取」の五つの柱を立てた。ここであえて竹取を持ち出したのは、前代と連なる古代的なものを多く含み持ちながら、同時に前代にはなかった仮名散文による物語として新生している点で、変質の落差が大きいこと、それだけにこの辺に射程を置くことによって、変質する表現の動態が捉えやすいのではないかと想定したことによる。さらに竹取に集約する形をとることで、個々の問題に終止することなく、ジャンルを越えて相互の関わりを有機的に捉えうるのではないかと、という意図もあった。

しかしながら、企画段階から一部に危惧されていたことが、総括討論でも「なぜ竹取か」という疑問が集中した。それは一つには企画側で竹取の位置づけが十分でなかったことと、また、意図に反して「なぜ表現は変わるのか」という点がさほど鮮明にならなかったために、五つの問題を相対化し、相互の問題として有機的に捉えきれなかったことにもよる。報告者の苦慮もこの問題に集中してい

る。その原因がどこにあるかは、さらに今後の検討を待たねばならないが、ここで前年度セミナーの総括に指摘されている、表現という実体を示す概念を純粋に想定することへの疑問が、改めて想起される。

そもその出発は、表現を表現主体の心的なものによって押えるのではなく、表現それ自体の論理として、表現の側から表現独自の展開を探ろうとしたものであった。現時点では、まだこの観点から十分に究明されたわけではなく、なお検討の余地はあるものの、結果的には「へなげ」を問うことをこの上なく難しくしていることも否めない。とすれば、括弧でくくられたままになっている、表現する側の心的なものとの兼ねあいも同時に考慮する必要があるのではないかとという疑問も生じ、再び原点に遡って「表現」の概念そのものが問題になってくる。

ともあれ、「表現」とは何かという問いかけは、今後も執拗に繰返されねばなるまい。過去においてもそうであったように、この種の問題は、その事の意味を繰返し問い直し、反省を加えながら見据えることで、はじめて定着しうる性質のものだからである。

一方、変質を問うことにより、かえって不変の部分が現れて来たとの指摘も、変質を問うことと表裏の関係をなすものであり、表現を累積的なものとする視点や、内部に層を持つものとの意見とも相俟って、これらを「表現史」にどう組み込むかも、今後の検討課題として残される。

三日間の多岐にわたる討論は、必ずしも「表現史」を深める方向で展開したとは言い切れない。だが、長歌と仮名散文、漢文体と和文体、説話と物語等、一見異質なものを対置し、これらを表現の動

態を視点として、統一的に捉えようとした試みは、それなりに意義あるものであったと思われる。

雑駁ではあるが、思いつくままに企画段階からの経過と、セミナーの多岐にわたる討論の内から、特にテーマと深く関わる問題を拾ってみた。以下は個々の報告について委員が分担し、討論の経過をも加味してコメントしたものを踏まえての要約である。

最初の吉野の報告は、万葉から古今への和歌の流れを、言語の多義性という視点から見通そうとしたものといえよう。その要点の一つは、万葉と古今とに見られる多義性は異質であるとし、その差異をもたらした要因を「書く」ことにあるとする点と、もう一つ、竹取を同時代の表現として古今集とほぼ等しいレベルにあるとみなし、両者は「書く」ことを媒介として「パラレルな関係」にある、とみる点にある。

万葉と古今の質的差異については従来も様ざまに指摘されており、ここでもそれらを加味したものととして首肯できるが、この問題を言語の表現自体の展開として捉えようとする視点は曖昧である。討論の折に指摘された、「書く」ことと表現の変質との関わりを問うことなく、書くことを無前提に変質の要因としていることによるかと思われる。

次は末内の報告だが、万葉と古今との間に竹取を置いて、それぞれの表現の質的差異を説明し、表現の展開を辿ろうとしたもので、歌の分析をもとに帰納的に論じている。

実は、この報告はセミナーの際に出された多くの疑問を解消すべく構想を新たにされたために、発表時のものとは全面的に違って

る。そこで、報告のあり方についても今後問題となろう。また、論点はしばらわれているものの、無前提に万葉、竹取、古今と直線的な展開を想定している点をはじめ、なお疑問とすべき点を残している。

猪股の報告は、長歌と竹取を共に「語り」と規定した上で、敬語を手がかりに語り手と「作中世界」との関わりを通して表現の展開に迫ろうとしたもの。長歌は語り手が「作中世界」と一体化しつつ分化するという二面性を持ち、「地の文」と「作中世界」とは親密だが、それは祭祀の「語り」と深層において関わっているからだとみる。一方、竹取では「作中世界」は対象化され、地の文と会話文に分化するが、そうなった後にも、なお「長歌的な語り」がその基底にあるという。表現の変質は、この語り手と「語る世界」との距離や、語り手の位置転換によるものとする。

ここでは異質なものを統一的に捉える視点が重要であるが、その点は語り手と語りの世界との関わりとして押えられている。だが、討論で指摘された「語り」の概念の曖昧さ、それは長歌をいきなり「語り」と規定している点に端的にみられるが、この点は避けたままになっており、これと関わる語り手と作者の関係についても検討課題として残されている。

丸山の報告では、まず作品の表現は、歴史的累積(歴史性)と「作品の現在の表現の拡がり」の中にある「現存性」を負うものとし、これらは個々の作品に実現されると同時に、「作品の個性を超えらる拡がり」を持つものとされ、この歴史性と現存性の抽出によって表現史は可能であろうとみる。

この視点はセミナーの折には明示されなかったが、表現の構造を

基底にすえて「表現史」に真正面から取り組んだものとして、意欲的である。だが、具体的分析に当って古事記の歴史性と現存性を、「音声」と「文字」による「表現手段の差異」として提示されると、いささか問題があるようだ。こうした捉え方は従来の表現史的な実体論に落ち入りかねないと危惧する向きもあり、また、古事記の成立史への配慮はみられるものの、現古事記の歴史性、現存性を単に「音声」と「文字」に還元しうるのか、という疑問も生じる。この点は論の根幹であるだけに、なお検討の余地がある。もっとも、この報告は極めて抽象的で難解であるために、誤読による杞憂であるかもしれない。

増田の報告は、発表時の「話文」という概念を退けて、代って登場人物の会話を発話と規定し、風土記と竹取を軸に「古代の語りにおける発話の表現史」を試みたものといえる。具体的には、竹取の構成を通説に従って天人女房譚と難題譚から成るとし、後者は「物語の発話表現」で、風土記のそれとは直接関わりない点を詳説した上で、竹取の冒頭を中心に風土記との関係に説き及ぶ。

両者は天人女房の様式を共通にするものの、風土記では「異郷やそこから訪れる人」と直接関わる形で発話があるのに対し、竹取では「呪物を奪うモチーフを欠く」ために発話が変質している、という主旨かと思われる。

ここで「発話」の概念規定はあるものの、やや曖昧な点もみられ、会話を指すと同時に「語り」そのものをも指示しているようにも読みとれる。これを視点として「なぜ」という変質の要因を押えるという点も、両者の違いの指摘に留まり、なお曖昧で、論の輝きはむしろ風土記との対比において、かぐや姫の本質を抉出した部分

にみられる。

最後の三浦の報告は、くらもちの皇子の段と類型をなす靈異記の一話を対比的に取り上げ、物語と説話の文体を問題にして、表現史をめざしている。具体的には、説話は場面設定の単調さのみあつた直接的な表現であるのに対し、物語は立体的であり、複合的な文体を以て描写されると説く。この差異は説話の文体が「様式性に支えられて表現としての自立性に支えられている」からであり、逆に物語のそれは「様式を打ち破ろうとする意識的な試み」によるものとする。

## 短歌表現史と竹取物語

吉野 樹紀

——「書くこと」と「修辞」を手がかりとして——

一

既に指摘されているように『竹取物語』は「書く」ことを自覚的に追求した「物語文学」である。その徴証は、古来から口承文芸によって伝承化されてきた様々な話型がパロディー化されながら複合化されている点や、各章段末の擬語源説における地名起源伝説のパロディー化、多義性、多言語の内在的組織化、「今は昔」という時間意識と「けり——たり」という辞の使い分けによる「虚構」の手法化、「作者」が「語り手」「話者」の中に拡散化されている点などにみることができ<sup>1</sup>る。そして、このような形で神話的世界から離れてまったく新しい「物語文学」を生み出した『竹取物語』は、古

これまでの経過で、両者の描写力の差異は明確だが、へなせに<sup>2</sup> ついての解答になると、仮名文字の成立と漢文体の表現によって獲得された構成力や抽象力によるとの指摘に終っている。確かにその通りではあるが、もう一つ迫力を欠く。この点はセミナーの際には表現主体の觀念の変化として明示されていたが、この捉え方を表現外からの説明とする批判を考慮したためか、究極的には表現主体の世界観等を考慮せざるを得ないとしながらも、この報告では後退させている。

(文責 高野正美)

代末期に成立した仮名文字によって書かれているのである。

仮名によって書かれたという『竹取物語』の特質を「修辞」という側面からとらえるならば、それは掛詞や物名といった表現に顕著にあらわれている。仮名文字は漢字の持つ表意性を捨象して表音性を抽出したものであるから、それだけにより音声的なものの側に傾いた表記法であり、同音異義語などを利用した掛詞や物名といった修辞を表現するのに適しているのだといえるだろう。とはいえ、元来単純な音韻組織を持つ和語には多数の同音異義語が存在し、仮名の成立を待つまでもなく、その性質を利用した掛詞や物名は前代にもみいだすことができる。事実、『竹取物語』の各章段末尾に付け加えられた擬語源説の持つ物名性は、前代の地名起源伝説の延長上に位置づけられるものである。だが、『竹取物語』は仮名で「書く」ことによって、それを意識的に方法化することに成功したのである。

石作の皇子の章段をみてみよう。はじめ、